



源氏辨了抄

十一



天
際
文
庫



少貳シウジ任ニ之ヲ 仁明天皇ニ 諸國守ノ今者ニ以テ四年ヲ可シ為ス限リ但シテ陰ヲ奧ニ出ス羽ノ太ノ宰ノ府ニ 是レ云フ官ノ國ノ始ニ自リ筑ノ前ニ等ノ遊ニ在リ千ノ里ニ以テ五ノ十ノ年ヲ可シ為ス

いさ乃ハ別ニ也ニ 古今十八ノ四ノのハいさ乃ハ別ニ也ニ 時ノあり

いさ乃ハ別ニ也ニ 古今十八ノ四ノのハいさ乃ハ別ニ也ニ 時ノあり

四子羽翼シウシ既ニ成ニ將ニ分ニ離ニ悲ニ鳴ニ以テ相ニ送ニとシとシとシとシのハ別ニ也ニ

千平振チヒラのハ乃ハみハ勝ニとシれハ我ハ志ハ可シ廉ノのハ皇ノ祚ニ事ナナリ

金葉集キンエツ連ニ歎ニ也ニ 志ハ加ニ時ニ海ノ前ニ糟ノ屋ノ郡ニ也ニ

少貳任シウジ之ヲ 仁明天皇ニ 諸國守ノ今者ニ以テ四年ヲ可シ為ス限リ但シテ陰ヲ奧ニ出ス羽ノ太ノ宰ノ府ニ 是レ云フ官ノ國ノ始ニ自リ筑ノ前ニ等ノ遊ニ在リ千ノ里ニ以テ五ノ十ノ年ヲ可シ為ス

陸奥國ニ鎮守府アリ此下ニ軍監ト云官アリ軍ハ

東ニアリ監ハ西ニアリ武官也 河海

大典 唐名都督録事 相當正七位上 少典 相當正八位上

かうひりく 曾の字也子孫のゆり

會曰曾重也自曾祖至無窮皆得稱曾孫

せぬ 川河汁也

松送 人もみねおま 昔君とよがせぬまごくとせしむるま

けさ 人い夜よりこれらとよまひとらひされ

河竹の物伝云 靴いやまにのちも移どやとの靴も出てお

とく つとむしむと海とみあつつかはつらうらひ

と つひくらき

海 くさまのクサも秋るねも何や

在令 かつ とくもさりくさのち秋の名あやしかり

まつ びらみのか 肥前四松浦郡鏡の村

右 宰少貳藤原廣建が又鏡山の村功皇后の

以 鏡化して石とられちと云是とを鏡の村と云

べき まや

日本紀曰神功皇后到火前國松浦縣進食於玉

嶋里小河側 奉釣竿獲細鱗魚曰希見物也 希見

梅豆 今謂松浦訛也 風土記曰神功皇后在此

白氏文集傳戒人詞曰梁京鄉井不得見胡地妻
 鬼虛奔捐（手）後漢攻胡之時漢人止胡國不
 得歸漢軍敗之故也後又後漢攻胡之時止胡之
 人欲歸漢也此時奔胡妻子而漢不入彼人割園
 之号敵國住人也仍兩國无便之意叶物諸喻

やりの言と申すはこはてをぬつりあひのり申すは
 松浦のそごは同社也 松浦の社切皇辰也配

前國也管崎の八幡大菩薩也筑前國也今あるは
 祈請せりまうく一管崎同社と山城八幡の
 也國より松浦と管崎と祈しと云

切の文乃り 八幡宮の五師也

貞觀（河）五十六代 八年別當安宗之時以還如法師始
 補五師安和（清和天皇）六十三代 二年別當貞芳時以五師貞善
 法師始補大五師（花）村上（六十）御記云康保二
 年八月廿八日藥師寺三綱五師等相率參陣外
 一勅云五師の法師のつとめは五人のり不
 能八幡宮よりかきく寸諸寺より五師いあらる也
 佛の心中まゝとせ 前より佛のゆとりは故より佛
 とついで佛と對し洵に菩薩也菩薩は佛の化
 生るれい同佛と云ふ也

元亨款書曰長谷寺者比丘道明沙弥德道加力力
 建其像材者自近州高嶋郡三尾山流出霹靂水
 也木之至有瘦災漸漂流至和州葛下郡神河
 浦道明欲取此木刻中仏像而無資力專心礼木祈
 求金紫光禄大夫中書侍郎藤房前奏賜和州祖
 稻三千束乃刻十一面觀音像高二丈六尺震雷
 破巖石為座方八尺仏工替主勳替文會作之
 或人曰神亀四十五 四年成屈行基僧止落慶初
 刻像時夢神人告曰此山北峯土中有大巖石平
 正無瑕鑿土立像覺後往彼穿土果有大石方八

尺上印足跡与像脚同如夢言安像其上

縁記云德道上人より天竺ヨリ來朝アリシ法道
 仙人ノ一名也四十二代文武天皇御宇ノコト也金紫
 光禄大夫上正三位ノ唐名也中書侍郎トハ中務
 大輔ノ唐名也

何 僖宗皇帝 唐朝 十
 八主 辰

馬致夫人くさら俄まるまのごくるりと致まき
 浴ひくらはは仙人のとりへより東ま向て日中國毛公
 寺觀音ま祈ま請ま 浴ひくらはは夢中ま一人の貴僧
 紫ままま東方より來てままとのへて氷と

醜^シ酒^リと見^ルて忽^チ容^シ自^ラ端^正正^ニ成^リま^り因^テ乾^符符^ヲ
 三年丙申七月十八日侍女と引率して明州津^ノに
 出向て十種の寶物とま^りあ^りま^りけ^し寶物長谷^ノ
 寺^ニあり^し乾符三年八月廿六代法皇和天皇貞觀^ノ
 十八年^ニあり^し又玄倫大僧遣唐使^ニ養老元年^ニあり^し
 入唐の時長谷寺觀音^ノ祈請して野馬臺の傍と
 淡路^ノら^に蜘蛛糸とひ^きて教^へら^るに^て讀^まる^べし^と
 ころ^に君^とい^はれ^しめ^ぐに^はん

神龜^{四十五}元年二月廿二日勅^し依^て藤房前朝臣奏^し
 狀^ノ所載下稿三千束為^し長谷寺造佛料物^ト

藤氏繁昌と祈請せらるる長谷寺の縁起に載ての
 れ^がま^りて^しよ^うに^しむ^ろに^しれ^た父^ノ茂^氏の棟梁也
 から^りと^定ま^り

三願の時^にけ^りら^るへ^り
 ころ^にの^物は^大お^あり^し言^とい^ひけ^てその^祈初^め
 漱^もあ^らづ^らも^から^りと^定ま^り

つ^き市^ノ 小右記 小野宮 正暦元年九月八日

長谷寺午時至椿市令交易御明燈心器等奉御
 堂修^し諷^誦布^{二十}端^御明^三万^灯この^物は^終り
 お^叶へ^り

葉^ハ灰^ニす^り物^とつ^き市^レや^まの^らま^しは^ひこ^もた^る

おりのつゝのりやと安よてろく久

李邵王記延長六十六代八年八月醍醐作願ヲ金文遙イダテ祈長谷

寺奉灯明十方ヲ灯ヲ小右記云正曆六十六代一条院三年三

月ヲ奉長谷寺奉御ニ明十方灯ヲ

兵コト敷ダ寛平九十九御記云臣家有兵藤太者宇多

是ハ昭宣公のめつろりれ人の名也ハ物波の兵

敷右ハ忠房の命が童名也細流云父の兵部丞なるの

時子左衛門トなり姓ト加て敷右トなり歟

はづの 佛のすゝ海とい内陣といふ内陣は左

の座と座と座といふ今の世も座と座といふなり也

何れのとこといふよけはる大はよ

四海ノ安ニ危キ照ス掌ヲ内ニ百王ノ理チ乱ル懸ル心中ニ白氏文集

あまりまはく 引多詞計也

床ヲを一何ニまニ海ノ教ノ字ノのきりとと後も人のみしとれ

とらのみとらの観世者寺 一勤清水の内寺も観

世者寺も同ク欽清水の名のみ也

つ徳子對て松浦の教の時とい長谷寺を對て海

あの内寺とまなり作は海とあれなあらざら也滿也

か観者寺と作一時の寺

五ふふさはく是が山の舟本まら本まらりをせつ何と舟

在流前國沙弥滿誓觀世音寺建立則別當也 見万葉

都府樓總看瓦色 觀音寺只聽鐘聲 菅家詩

いふにともなれらる光やいかにひら

楞嚴經曰世尊頂放百寶無畏光明

佛の光响へ眉回らりも又是乃下らりも放法へ全身

と離らるる光も此世を中よ寂止の頃より放法は是

人のいふにともなふ寂止の頃ありし人也

家う海どももすす 師云せしよしきりのかほきみの 少貳小方尼云初也久き頃也

と於男子二人女子一人と於ときを即の空海今

も妻とも家とも於いふうとの男ともすすしと云

よ忠とつらと上落せしと云

あさりの杖

初瀬川古川のまよ 今 二平河杖年とて又もまよ 二平

く袂しき瀬も

みりつたのまどつら初瀬川に後き瀬も流あ 流

とつせ川もやくれと

吉野川岩波まく初あれ 古今 人も人といひ 古今

こ瀬へり 二 万葉土 三 若友 四 二ニガリ古点 ワカガリ仙覚ノ臣

洞窟のまよ 何 此よりが身老ぬ 何 又こ瀬へり 何 君と 何

とつたの肉流 何 土おこ 何 瀬へり 何 せ 何 へり 何

みまはなまのりみり

三鴻江提別鴻江郡三稜三稜

流麻江近江國のりみり海草の水を飲む酒は病を癒す人の

かどづり かのりはつり詞

あまのりみり常陸常陸郡のりみり

らめあどやうれめ

白波たをうらむ日たぬ日たぬと市は市女のたぬめを

とんあまのりみり 娘は少女をりみりのりみり長

しつらと女とりみり嫁しつらと婦とりみり老を

姫とりみり

かかるとなあつり 沖敵沖敵かとのとめを道に

何となくあつり

かどづりみりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

神代卷上九枚曰次生蛭コラ兒ニ雖ニ己ニ三歳脚猶不立

故載之於天磐櫛樟船而順風放棄

極子の父母は推ら推らしつりあつりあつりあつりあつり

あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

肉あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

ら延びてしむき礼法に^く氏種姓^もまじりての
人として肉心の善悪を^せ絶つてぬもの也孝子訓
むつび又^ままじりて^い出ま^まう^まら^ま時又^い困窮^もまじり
一^し時^もい^ま孝^ま子^らと^いん^ん人^の中^に性^あり^て見
え^るり^する^もあり又^ま世^ま子^らと^いん^ん人^の中^に性^あり^て見
ぬもの又^ま下^まに^いて^る人^は侮^まれ^るが^節義^正しく
ま^まの^の士^とい^ふは^まま^まの^の也^人と^いん^ん事
と^まま^まと^いん^ん人^と見^える^れぬ^れ知^ると^いん^ん友^とす^ら
り^する^れぬ^れ事^也又^ま知^りて^ある^人官^位と^すむ^ら
事^も改^める^もう^ま誹^謗せ^らる^も也^根人^の心^を

ま^まの^の人^乃友^まて^知也^又う^うと^とく^濁子^よと^せ
て^その^人乃^氣ま^まう^まが^換授^して^物と^いん^んれ
い^事ま^まう^まの^乃と^いん^んと^志て^中性^をあ^りて^あ
也^と荷^ま子^がつ^いい^い減^まう^まの^也
人^とい^ふま^まと^いん^んと^あり^てあ^りと^まれ^る ^師を^な分^が
父^の遺^言と^大切^なり^し妻^子と^持て^家と^持て^役
も^るま^ま都^へま^まと^いん^んと^律て^のり^忠肝^義膽^の
正^しき^やへ^天乃^も忠^と孝^と感^應して^源氏^を天^下
下^と掌^する^一流^の家^司の^中に^加へ^るり^古姓^を未^だ
た^らぬ^まま^ま也

それ後していつぞい

細 我力も後してらんや

その雅知とや源氏よろしい人のゆ也

貞觀政要唐太宗嘗謂侍臣曰夫以銅為鏡可以

正衣冠以古為鏡可以知興替以人為鏡可以明

得失朕常保此三鏡以防己過今魏徵祖述遂亡

一鏡矣

今業人とりて鏡とすう魏徵よりつとまり又正衣

冠して衣冠衣たるもいばあるや人のくさり乃

うけりきも後してみたりまいつぞい押さる

べきと等とのゆゆ也

後といふれぬ

うぶらまゝおせりおがら綿くまゝかきおまを

衣状 ぬすの衣を集らるとつづつ能因法師が

み代集の衣状のぞ

りうのすゐるう 有立字髓腦又宿成式奉七病

衣撰式ニ有レ病。諸ルガ髓腦ニ有レ八病是等也

一勅云廉主石見女の髓腦とつゝむりのゆゆ

抄也新撰髓腦ハ公任卿の撰也

かんたん

いせめくちまの鳥羽の衣乃衣とて

古今十二

おま町

初子 王鬘并之

以_レ并_レ詞_ヲ為_レ卷_ノ名_ト也_ト源_氏之_レ十_五卷_ノ正_月の_レ事
と_ノせ_レり_ト也_ト鬘_ノ并_ハ皆_聖の_レ并_也也_ト并_卷と_ハ
月_次よ_ハ一_年の_レ事_也

年_々ら_レる_レ細_の事_の事_也此_ハ並_ハ皆_聖の_レ并_也也_ト并_卷と_ハ
け_レ也

皆_聖の_レ并_也也_ト并_卷と_ハ月_次よ_ハ一_年の_レ事_也

ま_ハあ_レる_レん_ハな_ハは_レつ_ク秋_ハ涼_ク冬_ハ寒_クと_ハし_テ正_月の_レ事_也
ら_レら_レる_レ氣_運の_レ古_今と_ハま_ハあ_レる_レ天_代の_レ事_也神
皇_ノ事_也也_ト并_卷と_ハ月_次よ_ハ一_年の_レ事_也

のちとちへしど

むとちけるの前の庭をうらむるのふみわく

朗詠早春

庭増氣色晴沙緑

林裏容輝宿雪紅

齒固のついでにしらぬみ

元三の日記也

齒はらひとらじ齒とくしむらぬ高器をひり折

割とすへ一の臺を餅と根搗と盛也い餅い辺に

の大きき餅とち用う也是より懸りの國の鏡

山の方と詠る也

我々の世もゆらぬ後を嘆うへら歌をうる

高器と云りの丸き板のよみ鏡の胸の如き柱と

尺余のやん中よにてくよ丸き盆也盆の目より

一尺の也はくこ工如也火きりと云在赤野洲

の下より下笠と云里の肉也今いれて田の字と成り

後系と云藏玉集云正風餅上置大根のふ也

ふ年の陰もたらは年の申の一年中也

万代と松を君とよひつらふ年れびますん

かひてをんゆら

近江のや鏡の山とくされぬをんをんゆら

池の鏡

柳似舞腰池如鏡 白氏文集

氷池如破鏡雪影似残花 早春

後 去の日後 氣よ池の鏡と 柳の眉を 見んけり

くよひ日 元日の子日也

十節記 曰 正月子日 登岳遙望 四方得陰陽靜氣

除憂惱之術 子北方ノ水ヲ物ヲ濡ス徳アリ

倚松樹以摩腰習風霜之難 訖也 菅丞相

雲林院ニテ子日ノ行幸ニ扈從ニテ作レル序也 風霜

ニモ謂レヌハ松ノ徳也 松樹ハヒキタニ小松ノ也 韻會曰 後後日

倚松根而摩腰 千年之翠滿手 折梅花而掛頭 二月

月之雪落衣 子日野遊序 攝在 碑

松遺五 賀部康保 六十二 三年 内裏より 子日せさせ

流ひらりよ 敵とのものこそ 和字つらう まつりけり

藤原信俊

めづき 千世の娘乃子日と 先きよきと といふれ

前の山乃少ねしき 母之集よ 白河院 七代

子日 序さくよ 正月の時 さらぬ 娘のよ乃

是世 華れりよ 少ねと 梅と 可なり

かき 花と 花と 可なり

と 可なり

と 可なり

園融院 六十 寛和元年 正月 十三日 戊子 御幸 京野

とんぼころもいれ法よせしむるにいと借巻のあはれ
世のつれあはれは海よはしくもなす

古
世のつれあはれは海よはしくもなす
海で漉のよとみづらうけり

ま今十七
海で漉のよとみづらうけり
いず水と髪をゆせりしは海と髪よ

髪よ髪を漉よとみづらうけり
とみづらうけり

敬べき人よ敬ふまゝの道程のまゝ又古来高れ
まよとくもの行掃らるり鼻の赤とく梅へさし

病氣のいふは海と髪よはしくもなす
うらみとくもの行掃らるり鼻の赤とく梅へさし

うらみとくもの行掃らるり鼻の赤とく梅へさし
うらみとくもの行掃らるり鼻の赤とく梅へさし

かたがね
女切とたけ寒とくは海と髪よはしくもなす
えんじり

山がのよとみづらうけり
後撰十九
後撰十九
後撰十九

後撰十九
後撰十九
後撰十九

後撰十九
後撰十九
後撰十九

男編ありし頃の記録をいひて不見し其儀
式ハ西宮抄よりしり

九條右丞相記兼和五十四
仁明

四年正月十一日踏歌飯驛水驛被定之中宮飯
小宮水今宮飯許。右大臣宿夜飯。右大臣宿夜水。
左右大将宿夜飯。

李部王記延長五年代 七年正月編より水驛とて

進湯漬とあり天慶五年 八年正月編より葛驛
也とある引つくりい御念慈より我也踏歌此人也
巡と譯強子論より馬とをせり云云より人云酒茶

馬と水斗飼へ水澤とふ。又人と飯とすあるま
葉とふの飯譯とも葛驛ともふ。又厩牧令と水
驛と船といてとらと水澤とより今そのふ
てへあり
細トニニ杜子羨詩奴子白飯馬青窟と作り

竹川うらひて 催馬樂 呂 竹河

竹川の橋のつめちや。橋のつめちや。花園ふん
花苑ふん我とびとちや。我とびとちや。めとち
たぐへて

けち竹川の河内國あり。ちとちや。ちとちや。めとち
たぐへて。同とせとちや。

竹川の橋のつらなる花園は我とゆりせりしとて
愁々の繪もそりれとありしころん

詠眠獨議 慇懃處 畫出陽 際意外聲 東坡

龍眠八畫土ノ名歎世俗ヲサテテラゴト早音ニヨル西
陽園ハ旅人ヲ送り出ル園也此ハ二離別ノカナシキ
聲ヲ澹カキタ如ノ景ト也

ふの綿さらりてよろり
ふとせむ柳橋とありてはまのうらやろり

わうこののうらまれしり

西宮抄云百御巾子送御可奉高巾子二尺

肉装束抄云高巾子之六位以綿裏面

高巾子冠と巾子とをくくし白き衣とをくくすは
人ふより下しぬふ六位の舞人のうち二人を肩

す高巾子きらぬへ綿面とわうさらうへんしりき
ん別ぬよりせしむきとらとくり細流云程言馬

帽子の類るる

みいおきのみづりごりき 西宮云端奇立御前

奏壽詞

ころろき 祿物の綿と被也大裏とて机綿を
つとて玉とと袋持しとて一十百千万とふ人

て袋ふくろに入れてもゐて縮鴨ちぢ鴨といふやうにしてまゐ
ひらきしりね

この比乃人 延元天曆のちとてあはれまじりしりしり
かんすんらね

西宮抄ニ云編壽日舞ニ人起座唱ニ万春樂ヲ

我皇延祚カ億仙齡ニ万春樂ヲ元正慶序ニ年元麗ニ万春樂ヲ

催馬樂ニ淡海ニ姓三船也撰セ之ヲ多氏相傳之

今業万春樂ハ七言八句の詞也ハれと漢音ハらう
といひて句どののありは万春樂ト唱也ハ縮ハ舞ハ人
のうらゝ海ハいふるらと淡氏君の口ずきひまの

ねみ也三ハらうく二句と申付たり

いふくの後ハ宴ハあはるべしハのほいていハと申

不審抄ニ云まへ四方くうりまらりほひれと

ありてけ詞不審也ハらうまらりいハら

ほいて女樂ハのりほりらうと見ゆるべしハ物ハんハの

たうりらうハのらうもハいハまらりら

もやハ

吾衣ニ云推ハ中ハの巻ハ編ハ女樂ハありしりしり

あはれまらりしり

胡蝶

玉鬘并二

いさ并詞乃卷名源氏世三歳之月母のよとす
かのままのいさのいさ いさめ 少女卷よ秋好中宮あよ

いさまのいさのいさ いさめ 我宿のいさと風のつよにわんよ

竜臥鷓首

銚曰鷓首舟名淮南子曰竜舟鷓首

ま 鷓水鳥也畫其象著船首以禦水患

細 竜ハ水ヲ得タリ鷓ハ風ヲ得タリ

うづゆい ま 唐子のいさ いさめ 鬘也 いさめ 神代

うづゆい いさ 錦上鋪花 いさ 禪論

うづゆい いさ 夜乃まこといさ いさ たり

紫色也 河 繞廊紫藤架 夾砌紅藥欄

攀枝摘櫻桃 帶花移牡丹 白氏文集 秦中吟 紅藥芍藥也

とのえもくさいつるう 晋の玉質が故事也

後撰 百あひ弄乃柄くふ山をれやの一人のきづきせぬ

山吹のされ 何 蜻蛉日記云ふ山よまらりてくへりて

いづ崎山吹の崎まぐいふふとんやりて葎のゆり

漣ゆく 石 審抄云ふふふいふいふと山吹の崎せいし也

の山吹乃花なとふあうもゆるい山吹の崎せいし也

ゆらん世又ふふふ也

龜のこけ山も島ト舟の中に老せぬふとふ家よおん

不見蓬萊不敢歸童男何 非女舟中老 白氏文集

非懸菊也蓬萊山負龜背也

ゆらん世又ふふふ也 武陵桃源の故事

と含めり桃源と仙境のり也東晋晉九主孝武帝

の太元年中武陵といふ所の漢人莫と濟捕え

溪とゆふ還路と忘れてはらりよ桃花の林と見て人

あありやとんふの男女怡然とらの一ひふあり人

もく河の秦の亂と去て家よ隠わらしり也

蒙求中卷 武陵桃源

陶潛桃花源記云晋太元中武陵人捕魚綠溪行

忘路之遠近忽逢桃花林夾岸數百步中無雜樹
 芳華鮮美落英繽紛漢人甚異之復前行欲窮其
 林林盡水源得一山山有小口髣髴若有光便捨
 船後口入初極狹終通人復行數十步豁然開朗
 土地平曠屋舍儼然有良田美池桑竹之屬阡陌
 交通雞犬相聞其中往來種作男女衣著悉如外
 人黃髮垂髫怡然自樂見漢人大驚問所從來具
 答之便邀還家為設酒殺雞作食村中咸來問訊
 自云先世避秦亂率妻子邑人來此絕境不復出
 遂與外人間隔問今是何世乃不知有漢前漢十

二百十四年新室王莽十六年

後漢十四王合百九十五年

無論魏晉此人為

具言

魏五主合四十五年西晉四主合五十一

年東晉十一主一百三年

餘人各復延至其家皆出酒食停數日辭去既出
 得其船便攬向路處處誌之及郡詣太守說太守
 即遣人隨往尋向所誌遂迷不復得路

老子の子段干宗とよ道士の張道濩もみ孫あり

皇德記云後漢の第一主明帝の永平十八年
 劉農阮肇二人天台山へ薬を尋よへし道士は迷
 て飢よのぞむ時桃と見付て行て食も是よ力と
 得て山を一里づり行て仙女と逢て夫婦と成

て半^ニ年^ヲづ^クり^てて^て奮^ニ里^ヲに^て飲^ルる^ニ仙^女道^ヲを^て教^ヘて
飲^ルる^ニし^て思^フひ^てし^て七^ノ世^ノの^縁に^て逢^フふ^ニ

蒙^テ求^ム中^ノ卷^ニ 劉^阮天^台

續^ク齊^ノ詣^リ記^ス漢^ノ明^ノ帝^ノ永^平中^ニ剡^ノ縣^ニ有^リ劉^農阮^肇入^リ天
台^ノ山^ニ採^ル藥^ヲ迷^リ失^フ道^路糧^ヲ盡^シ望^ム山^ノ頭^ニ有^リ桃^ヲ共^ニ取^リ食^ス之^ヲ
如^シ覺^ル少^キ健^ニ下^リ山^ヲ得^テ澗^ニ水^ヲ飲^ム之^ヲ並^ニ澡^ス先^ノ例^ヲ望^ミ見^ル蔓^ヲ
菁^ヲ菜^ヲ後^ニ山^ニ復^テ出^ツ次^ニ有^リ一^ノ杯^ヲ流^ル出^ツ中^ニ有^リ胡^麻飲^シ屑^ヲ
二^ノ人^ノ相^テ謂^ク曰^ク去^リ人^ノ不^レ遠^ニ因^テ過^シ水^ヲ行^ク一^ノ里^ヲ又^テ度^ク一^ノ山^ヲ
出^ツ大^ノ溪^ニ見^ル二^ノ女^ノ顔^容絕^妙世^ニ未^ラ有^リ便^ニ喚^ク劉^阮姓^名
如^シ有^リ舊^ノ喜^向郎^等來^リ何^ノ晚^ニ因^テ邀^テ過^シ家^ノ厅^ニ平^也館^也

服^飾精^華東^西各^有有^リ床^帳帷^設七^寶瓔^珞非^世所^有
有^リ左^右直^悉青^衣端^正都^無男^子須^臾下^胡麻^飲
山^羊脯^甚美^又設^甘酒^有數^千客^將三^五桃^至云^ク
來^慶女^婿各^出樂^器歌^調作^樂日^向暮^仙女^各還^去
去^リ劉^阮就^テ邀^テ女^家山^宿行^夫婦^之道^留十^五日^ヲ
求^還女^曰來^此皆^是宥^福所^招得^子仙^女交^接流^俗
俗^何巫^樂遂^住半^年天^氣和^適常^如三^二月^百鳥^哀
哀^鳴悲^思求^歸甚^切女^曰罪^根未^滅使^君等^如此^更
更^喚諸^仙女^共作^歌吹^送劉^阮從^此山^東洞^口去^不
不^遠至^大道^隨其^言果^得還^家鄉^並無^相識^鄉里

春柳をけし来よりて常の如くよふこと梅の花を

ま乃えんとあ

花藏春鶴或藏春閣をくひか

あけしものさくくもいびくはく人かかろく

花む髪うら巻よきつるまゝのい籠かかの中うらこのまゝ

けふんみざうううゝゝすれめのたのふようは

ざらてのいけさうりよんゆりも明る物のくさうい

のるに程也

うらぬぬ中けいひよめえ

されぬの中かひひさうううわあうのくくもは

はのゆいよとさあひびくうらひよめえ

京

山乃一りくゆよ武蔵野のまゝみまづるまゝ

酒藤と測ちよれるすあ後撰よ

けりるひかまよなれむれいそこのおもさうぬもの

あけりくごうとまうりけり 右霜抄あつ

あゝにせして春のむとかぎてまうひまういん

あふとありも回一花をたよりまそかぎの君

よ置まうりけり

後撰我宿とたのむま好まゝ一うの目か

ふまつきまうり 所續しの座へ公卿かの衣い東とう華

まて裾すそをひき座まつきありしと着あけしと

新引巻十一

とろろ

河平三代

文武天皇御宇後對馬國始獻白銀

聖武天皇御宇自陸奥國始進黄金九百兩

あぐら

胡床

日本記

樂人の座也

作香の人

着座の云卿乃煖香へ初日浴服日

にあり先沈香を以て次子香燭とてりて

香せしり後者と作香大会といふ大会とい次子

物と香燭のゆい後者と作香の人といきり

かの紅葉乃山くり也り

し女卷よ秋好中文あよ

ふらまは菌へ我宿乃紅葉と用のつてまばよ

まのすけ

中宮の亮也

中宮職

大夫一人

権一人

亮一人

権

大進一人

権

少進

権

屬

大正八位下

孫子ひきぬへく

我宿の梅のやづえよ雪乃春よ啼ぬべき雪も

藻汐草云梅のやづえよ末の枝之梅のうつんせよ

又つがめら枝とやづえといふ説もあり

八雲抄云やづえい木すゑ也

八重山吹とへそ

名ありかへ八重山吹をうりりりへそとれり

こひの山まぐろのなれ

師云
 ふうり意の山海の成るれつると入ぬる人まよらん
孔子 孔子の人の意も海よと也師云 韓愈大約意法の人
師云 此我を髪蒙る子といひ乱流よとく好むと恐れつごめ
戒 と戒らる頃之上古ま儒書と吳音よ一ゆへ
孔子 孔子とま一り平家物語をともと周公且とわりよ
十代 十代桓武天皇より天下にみごとりのりりて佛書い
吳音 吳音儒の十三經漢音よ一じり也された名同い古
法 法のじく吳音よてい付り書よじひてよじ
時 時皆漢音也禮記檀弓篇孝經この歌り
み み見らるへ好ふ 師云 人いん好むよせんと一いふ

師云
 ぬらと又さるき漢法の人と海くを見らる途
 じり物流と見らる也 師云 恒吉物流子継母のあく
い いあて又よく成しり之熱して一へ乃
あ りとりて世の理人の情を知り也
日 日一て又きり 河 白氏文集十九日四月天
氣 氣和且清緑槐陰合沙堤平
白 白氏長慶集八五帙都五十卷己八前也後二長慶以
後 後ノヲ加テ白氏文集ト成テ十帙七十五卷ニスル也白樂
天 天ガ詩文ヲ集メタル書也今ノ世ニ行ルハ七十一卷アリ
帙 帙ハ書ノ衣也長慶ト八唐ノ十二代穆宗ノ年号也

白氏文集

橘のりり〜神子

お月まゝる橘のこをびの昔の人の神のうせす

五六 橘のまゝ花をの葉を枝におね雖降益常葉の樹

月の竹まびらり〜花やい〜せらり月け

朗詠 夏夜

白樂天

風生竹夜窓間卧 月照松時正上行

白樂天ハ北窓ノ友トテ竹ヲ植テ愛シタリ

くらとけて祢も足ぬ 切テ

〜つみ祢もげも足ぬるまよと人のほんとはどをよ

切つたの松乃り〜せらりりり〜

森 意侘ぬ大園の松乃大〜い色も出てやゆん〜いしほ

い奇洞總集にも重之集にもありけい〜もやま

〜とろろ〜りり〜あり〜の洞もやまよせらり

せらり〜せらり〜りり〜

ては髪とくうせして肉付のうねすゝんぬいと
あり車胤が沙の囊は髪とりらして文を照して
ふみーんぶんよあや

菅大女とんら例に至り髪とくうて女車よんらし
時をさぐあふす打啼らん

水月ぬもあひとれ時をたたく啼てららゆかん
ためーいもひきこつべき様よ

水くねあつら水月のあやのままはなりよんひん
あやめもさすあられる様の

時をさぐあひとれ時をたたく啼てららゆかん
時をさぐあひとれ時をたたく啼てららゆかん

くまむ 公事根原抄云天皇武徳敏子出御成

て宴會とけられ群は酒とけられ肉群もとも

出節は同一く草薙の髪とくく日蔭髪との

典藥寮草薙の机とも群は薬玉とあ

み色の糸とて臂よりくれい悪鬼とくうとや

文ゆらや

肉付薬玉とたまひ下は髪の時をむと石の扇よ

打うけて左の服へ入れて二の端とつけて腰よ

て各群舞する也

至徳記云内裏より線取より薬玉と獻ぐ云年九月

九月、御帳の左石、菜萁の囊とけ、御前、氣
瓶と玉とと撤去して、菜玉を敷入て、九月とこれ
と並、秋の御敵の御帳、東の極、付る也、と云ふ
の、菜女町の也、あり

今世、皇太子、下小兒の耐、づり、神、懸る、為攘、
鬼、也、五、五、の系、まて、一、たら、ひ、も、び、花、也、異、朝、も、也
あり、也、荆楚歲時記、長命、樓、續、命、樓、と、河、の
い、も、也、延、命、の、祝、也、

中納のき、のつ、さ、のて、づ、み 武徳殿、と、菜、玉、の

次、騎射、あり、大將、射、の、奏、と、も、左、右、進、退、も、も
棄て、ら、と、射、る、是、と、も、さ、ら、せ、ら、う、と、も、の、根、源、も、も
禁中、の、と、ら、う、と、源、氏、の、所、和、と、も、あ、る、と、云

名目、と、名目、と、名目、と、

又、左、右、進、退、馬、場、騎、射、の、り、女、目、三、日、いた、進、退、も、も、結
五、日、の、真、子、流、る、れ、い、夕、旁、左、中、納、是、と、六、条、院、と、も
換、せ、ら、る、も、や、早、日、の、左、邊、の、ま、り、と、流、る、見、の、真、子、流、也、
射、の、い、大、納、の、所、流、せ、ら、る、も、也、

す、け、ら、
中納、少將、と、り、進、退、府、と、大、納、中、納、將
將、監、之、大、將、中、納、將、と、羽、林、と、り、善、花、の、一、勳、と、
禁中、と、り、中、納、將、の、射、ら、る、も、六、条、院、と、り、羽、林、也、

の射らと海みとよとよ

打毬ヒキ樂ラクらくそん

打毬樂ヒキラク

大食 納蘇利 高廉一巡調

六日武徳殿の騎射きよとて打毬ヒキのそりあり 唐人の

装束にて馬よのりて毬ヒキ子ことくらししと打毬ヒキ

といふそ耐奏たうする樂ラクと打毬樂ヒキラクといふ納蘇利なすりも六

日の競馬けいばの日雅樂みや察さつと奏そうす

その詞ことばとすそめまるとみまにけらみまのちやめらやひが

神樂かみらく 其約そのやく

そのこほぞや我われも然しかもまらよまらとらりかえん水みづ

とらりまよとらりかえんや

草くさのみ草くさりあは立音たちね相通あひあ也なり又云約またいひやくが我われもまると也なり

又云約またいひやくよりんとしてまるとも也なり

香かぐとあて前まへ人ひとあつと高藩たかはんまほやくのすま

すそめめい名愛なあい也なりし女卷めまきよ花散里はなさんりのこよ高藩たかはんと

極たぎくらしとみめ

恒言つねごとの姫君ひめぎみ 申納言まうなごん兼かねた島門しまかど督とくのち方ちかたいす掃はられ

姫ひめ家け也なりけ版ばんのむとめ八歳やちの時母ときははとせ流ながり後妻のちのつま諸もろ

大更おほよりの始はじり版ばんよ女子むすめこそ人ひとあり言版ごんばんのあひみめも

ゆもすくれらると交まじはると又またとへると繼母ついでははとねえ

六前堂むくぜんどうの前まへ高たかけ姫ひめ表あはれかみとて虚言うそごとといひあやき

法師とくしひ姫君のすむ討ち出てゆく
 せよせて申納言よんむら又あき海へくせひてまは
 とくしひさまりぬる肉とけの子よて幸ね右昔
 誓よあんせんとす継母又七十九りする主計の
 老より妻よるれしるよとせらちあせとれしひ
 合より姉姫君きく付て母言の乳母の危よりりて
 位者よ病るがれとへまげゆき給ふけゆへは位言の姫
 君といふあくる年幸ね申納言よりて姫君のみ
 とくしひくせひて九月は洵漸へ七日こりて初
 は行言よ若給よと夢の告ありき田山と越て後言へ

初給よ琴の者すと安付て尋ね給へり都へ興
 のかり給よと糸重極よすくとよ又の年七月よあ
 まとうめりもは姫君とめり申納言は園白と
 むりらつてまへに位申納言とらりけりとの姫君は女
 とあきりけりよとまへて申納言の姫君とまのま
 前のまよとらり母のあそりよとまへてまへて二人
 のむよめのもも離れしるは姫二人の母とて
 申納言くまり涙まきまらりよとらりてのまへ母は死
 りてくまらりらん あらうよとまへてまへて
 万葉集 文いろはのたごころのまへてまへてまへて

さみぢれのみ乃みぢらういともて

時百千反まけうまひこが打たれ髪のみ目面乃此

りつうまらんこれ 五 古今序子僧正遍昭いふは海

えされど海しすくかへへ踏まけら女と見え

いづつまらんこころすりこ

日本紀 三十卷一ふ会人親王と後宮位下右

細江安磨と奉勅撰之始神代皇三十一代持統

天皇記之

これらまじやるしくくくく記ふいあめ

無 一々の終は世のまらりはるれりてと云

魚是地とまられ移いとの乃よ地といふと

いづつまらんこころすりこ

よ叶えんころもき他名双紙も文章をもつてあ

知りいさなるすといふとあ 仏法の奥すれ

りも和奇つそまのひあつりすがとく 又風琴

水鏡も法身の位法とんら何い漢きも海まはりあ

記も阿きも世ようら人のあり海

い何下のい海氏物鏡も莊子が寓言乃知らるとり

寓言者以己之言借他人之名以言也ト註せり

佛のいふ海もきんもてと記ときはるるみのり

三世諸佛出世の中懷へ衆生成佛の直道也是と
ういふ一きんといふは衆生の機統也世に
より先方彼の權教と説法乃花嚴經也

華嚴經六十卷也梵網經二卷ラ如テ六十二卷トス
三七日説法也權大乘ト元首ト号ス此經ニハ説別
圓頓大旨利厚殖時カ菩提機故名兼教舍利弗
等諸大聲聞如響如應如霜非其境界也如來哀
之擬宜為如何度之故名擬宜教聲聞等不知其
法味故名乳味教ニハ實大乘ヲ和テ權教ヲトケリ
此經ニハ有ト説タリ春ニタトヘリ

ほうべんとつり 天台宗の教よりうへ法華と

高夏とて尔前の法教と皆方便とす阿含經ハ
一向小乘也亦他も發とすり衣と墨と漆とけし時
くする是へ解し衆生の執心とつり破んの方使
阿含經ハ一向小乘トス俱舍論小乘也諸宗先學之
也成實コレモ小乘也律コレハ大乘律小乘律アリ
此等阿含ノ内也阿含ハ十二年ノ説法也コノ經ニハ空
ト説ナリ秋ニタトヘタリ説但ニ三藏法廣度ニ衆人故
名但教雖非是如來本意誘引小根故名誘引教
聲聞等少分知其法味故名酪味教衆生ノ機ヲ見

抑揚褒貶シ玉フユニ爰ニ云レハ彼ニカハル終ニハ有無ノ
二執ヲ離レテ一實相ニ歸セシメン為也

いとうり経

復ニタトフ大衆教ニ入ル初内ト云説

無時ナリ。説藏通別圓法四教機各々聞之面々
得悟故云四教并對教而如来為捨小衆歸大衆
故彈呵小衆涅槃故名彈呵教聲聞等駐永慕大
故名生種味教而猶證果昧改也四教ハ一代五時
説法ヲ云故ニ云化法四教コノ中ニ三藏教ハ小衆也阿
含經ノ説也通教トハ三衆共學ノ教也般若經説也
別教トハ菩薩ノ教也花嚴方等般若等ノ説也。

圓教トハ花嚴方等般若法花涅槃等説也正クハ
法花一説名純圓教又化儀ノ四教トハ漸教ハ阿含
ヨリ法花マデヲ云頓教トハ花嚴ナリ秘密教トハ衆多
法ヲ説聞已所樂不聞他所得也不定教トハ大小互
聞小悟大聞大悟小等也コノ方等ニテ昔ノサトリ
ニモワズ今ノ悟ヲモ得ズ有空錯亂シテ迦葉ハ泣テ
三千ニフルニ善吉ハ忙然トメ手ニ一鉢ヲオトセリ須菩
提ハ梵語此云善吉此時ニ破石ハニタゴ合ニ二衆ノ心
佛ニナラズ教タル種ハ生ズルニ二衆ノ心ハ仏ニナラズ狐狼
野子トハ成住ニ二衆ノ見ヲナスベカラズト説テ淨名經

思益經ナド方等ノ内也

つひのゆけびしつひのよきごころ

般若經の心是花嚴より有とつひ阿含より空理より
つづき方等にして有定錯亂し一般若より陶師也
畢竟有定と説より小機をゆりより入万法正
のさりとて子孫よと一旨とよ也

般若經四十卷に王經二卷ヲ加テ四十二卷トス
大品經トモ云也二十九年説相ナリ。或ハ三十年
云権大家也二三論宗ノ依經トス説後三大家利通
別圓機故名帶教聲聞等被加轉教付財故名調

然教聲聞等深悟大家法味故亦云熟獲味教

がふとびんるうやのぬごつとらん

法花の内證より見れば塵と法と一色一香これ
純一玄相の神也天際日外月降し荷葉の丸く
松葉の細きこれ自然の道理より天ののつとび也
空の時なるこれより道理也速い菩提の氷氷とるり
情れ煩悩の氷がふとるり如く一元素より一性也
法花八巻觀普賢經 無量義經 十卷
コレヲ三部經ト云八ヶ年ノ説法也實大家トス説
純圓一實有諸大聲聞等各皆悟本來成佛理

故名醍醐味教

らくらくいすて何のりもびのりく

師云

らくらく真實の義也四十餘年未顯真實とあり
山本云煩悩と云ふ則菩提有り菩提と云ふ
則煩悩有り要けい煩悩をとりぬら菩提は
るまの也衆生の覺佛の家也龍女が無垢世界の
成るをさげしと毒竜の角と後麟とくくうらま
ゆくと只そのまの成る也未開會氣のまへま
煩悩と菩提と二あり立て出死と涅槃と二路も
る一方便と馬車と別者よく法前も後もなり

法苑開會の前ま此妙彼妙妙義無殊と云ふ
前亦後の隔あり之趣也則毘盧身土也繪紙
いづづとるりとんま煩悩也万法了如とんま繪
物鏡也則陀羅尼と同して菩提也吾息不二邪
正一如の理と観とべし

師云

涅槃經四十卷コノ内之後分二卷像法決疑經
一卷アリ一日一夜ノ說法也法花ノ落穂ヲ拾ト
云リ實大業也冬ニタトヘタリ。說常住佛性旨
四教機同悟故亦名同醍醐味也決一代不盡
故曰攝捨教也法花ト涅槃トヲ一味トメ五時也

ふけりけり佛のなまもみくくをいふ

小學二曰孔子曰五刑之屬三千而罪莫大於不

孝

心地觀法二云世間之恩有其四種一父母恩二

衆生恩三國王恩四三宝恩如是四恩一切衆平

等荷負善男子父母恩者父有慈恩母有悲恩

世間至高莫過山岳慈父之恩逾於須弥世間之

重大地為先慈母之恩過於彼若有男女背恩不

順令其父母生怨念心以每發惡言是子即隨墮

在地獄餓鬼畜生云此外諸經三説云不違記

んごうくくれい

娘子理つめいせられ親氣をい

ふ海也人倫の礼法をいさくといふるべきこと次

嗟嘆

二海野の物語

枕草子にもあり是と用へ

表紙まらまの物語とあり

うづかのむらさきのむらさき

うづかの物語は源氏異名也一世の源氏とて大

將政頼と云人も方二人もり一人は大政大臣

の娘一人の時帝代は妹源氏の女一人の娘は其

版の九子ありはよめて君とよみめ心すられ

新くされば春宮と嬉まりて時の有職安つらん心と
 つくをいふ人ふつらて春宮へまがりほひぬま
 源が持とり少人の如家一と山よりりて行先
 の信成院に又と湯をひてすすり入てやぐ絶
 入ぬ奉前御遊野のますかそてつらく
 可きりーきんこころ人の憤とあてうき又と作
 て内裏へまがりてやぐれを帝見給あよさうまき
 りれと事よりされ男女の子れまで皆流
 つりぬ見治大臣と云人の家よりつけ焼亡が
 一と山よりぬい外敷わがー又宰相これ

斗とあてあしころよはまころのきーと終よ
 とくも

毒は所者よせある命と美さる泉の水を知らん
 とぬといふたぬれもせん物とのさよ命の君り海より
 又ゆきゆきのさぬれとよみて何と君と使よま
 つすれぬる人のさよのせぬ物を只んせつれ目
 海一といふの如くあり是と女一きさおあいの
 とされ海とわたりる何りごととせつらきーがと
 立身行道揚名於後世以顯父母孝之終也 孝経
 すべてあつぬ人よいそ人びあをせー



細

白樂天座銘曰勿令名過實

幸分別る人よりめそこなりける此あり

